

# 飲水思源

町長 松岡市郎

## 花見の季節

日に日に暖かさが増し、待ち望んだ春がやってきた。春といえば、私たち日本人にとつては花見である。

去年は4月下旬に桜が開花した。

毎年5月10日前後に羽衣公園で開かれている花見会ではまったく花がなくなつてしまひ「その昔、人々は桜の満開と豊作を重ね合わせて願つたことだろう」と思ひながら、花は「ハナ」でも、話（ハナ）しに花を咲かせた。

4月に開花したことも未曾有。この未曾有が重なり、稲作は多くの人々の思いが通じたのであろうか、開拓以来の大豊作となつた。農家に笑顔が戻ってくることは地域活力の原点でもある。この明るいニュースで後継者が一人でも多く戻ってくることに期待したい。

さて、花見の時期がやってくると、いつも平家物語の冒頭の一節を思い出す。

「盛者必衰（じょうしゃひつすい）の理（ことわり）をあらわす、おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけし者ついに滅びぬ、ひとえに風の前の塵（ちり）に

同じ…」である。

桜の一生は365日の中で語られ、人の一生は長くとはいわれるが、それはほんの一瞬のことである。しかも輝きを放っている期間となるときに短い。この輝きのある中、どう自分らしく生きるかが問われているように思える。

話を戻すと、ピンク色の桜の花満開は、私たちに元気を与えてくれる。外国では桜と言えば日本のイメージが高いようだ。

昨年姉妹提携したラトヴィア共和国ルーイエナ町のグラトキンス町長は「是非、桜の木を植えて交流のシンボルにしたい」と語っている。今年の訪問団は桜植樹も計画している。桜の花が世界平和のシンボルとなり、世界の人々が元気に花見をしながら酒を酌み交わす日、日本文化が世界の人々に定着する日も近いのでは…。また今年、未来へ向かつて、町内の公共施設周辺に町や民間支援による桜植樹が計画されている。今年の桜の満開はいつごろだろうか。秋には農家の皆さんの「喜びの笑顔」が満開となり、「大豊作の話」に花が咲きますことを願つて。

## 短歌

ビニールを被りしハウスは静かなり弥生の雪よ心して降り  
淋しきに日記めくれは鮮やかに八十年の吾が生きたし  
限りあるわれの人生大切に夫とふたり仲良く生きたし  
気がつけば足の疼痛忘れをり春の気配に軽々歩む  
一生は思ひのほかから早からむ夜の砂時計いちずになだるる  
解けてから又降る雪は淡雪かやさしさ添えて裸木なずる  
褪せてなお生きねばならぬ姥桜生死の運命はみ佛の掌に  
暖冬とて一夜の風が弄ぶ木々の芽ひそかにいろめき初めむ  
此のまま分相応の幸せと謝して運命の残り日を生く  
故御代孝代様に捧ぐ

松倉和子  
笹田富士子  
岡澤チズ子  
清水チヨ  
宮坂敬子  
矢沢ますえ  
中田治子  
嶋崎ミエ  
瓜生昭枝  
永江栄子

## 俳句

母子草群生の地をなつかしむ  
空耳か呼び止められし母子草  
摘む人の絶えて久しや母子草  
轉やおもいのたけをこの空へ  
母子草いつしか母の齢をこえ  
採りたてを酔味噌で一杯春の宵  
記念樹の轉にある窓辺かな  
手話の子の指生き生きと轉れり  
母子草黄梨とばして燃へにけり  
啄木の老母恋う歌や母子草  
浮くさくらしむさくらや人の逝く  
なしおえて路傍に映える母子草  
日陰れば轉りふとやむ広野かな  
薄氷を割りて蛇のごと水走る

山口佐知子  
高瀬潤  
石澤清宏  
澤田久美子  
松山蓉子  
三島智  
長谷川きみ糸  
小林露葉  
青野公花  
宮坂紫雲  
秋山深雪  
杉山ひろのり  
徳光吐苦  
杉山りつ